



TITLE:

事務室より

AUTHOR(S):

CITATION:

事務室より. 天界 1929, 9(103): 530-530

ISSUE DATE:

1929-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161465>

RIGHT:

事務室より

會員諸君から御親切にも暑中見舞の手紙を下さいました事を厚く御禮申し上げます。

暑中休暇中は諸先生が花山天文臺への移轉で御忙しく、又重力觀測旅行の爲御不在の方もあり、會計係も少し休暇を頂いて旅行しました爲、御質問や御紹介に對する御返事が幾分遅れました。さうか悪しからず御諒承下さい。

事務室も今春以來度々移轉しましたが、今度は天文學教室南館階上の講義室の隣に定りました。

編輯室より

かねて記して置きました通り、本號は思ひ切つて「花山天文臺記念號」として編輯しました。花山天文臺は、ひそり京都帝國大學の誇りであるばかりでなく、其の位置に於いて、其の建築に於いて、其の整つた設備に於いて、其の景勝に於いて、あらゆる意味から我が日本の典型的天文臺と見るべきものであります。——花山の建築が出来たのが本年七月末、それから直ぐ移轉や設備整頓が始められ、其のため臺員の人々は全く今度は夏期休暇無しの大車輪でした。それで、九月末には總ての仕事が殆んど完成したといふわけです。此の大多忙の中に本號の編輯が行はれたので、いよいよ本號が出来上つて見るに、尙ほ不満な點も澤山ありますが、それは追々加へて行くより仕方が無いこゝでせう。

何と言つても花山は我が天文學界の誇りです。誰でも先づ來て御覽下さい。天文の事はさておいて、只、附近の山川の景色を見るだけでも價値は充分にあります。千年の歴史に輝やく古都の内外は一眸の下にあります。晝の景色だけではありません。夜は京都から山科から太坂や生駒山の、遠近にひろがる大きい電飾の景色は筆も言葉も及びません。天文臺の臺員たちでさへ、夕暮後の一二時間は、絶景に見られて、觀測時間を忘れるぐらゐです。（本號には附録「天文語彙」なし。）